

国語 その一（七枚のうち）

次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

（注）小学校三年生の「ぼく」のおばあちゃんは急に倒れ、入院した。おかあさんは付き添いのため病院に泊まり込むことがつづき、そのことが原因でおとうさんと不仲になっていた。

おばあちゃんが退院したのは、つぎの週の火曜日だった。元気になったからではなくて、これ以上は病院にいても治療のしようがないからだ。それなら自宅で介護をしようと、おかあさんのきょうだいで話しあつて決めたという。

千夏おばさんがおばあちゃんの家でくらし、みんなもできるはんにで手助けをする。ヘルパーさんの手も借りるし、近くのお医者さんも協力してくれて、おばあちゃんの様子が変わるときには夜中でも診察にきてくれるとのことだった。

「健ちゃん。そういうわけだから、今度の金曜日はおばあちゃんのうちに泊まらない？」
おかあさんにさそわれて、ぼくの胸がドキンと鳴った。

——その夜に、おばあちゃんが死んだらどうしよう。
考えただけで、ぼくはこわかった。

「おとうさんも一緒ならいいよ」
とつさに答えると、おかあさんが目をそらした。

「だって、ほら。おばあちゃんにもしものことがあつたら、おかあさんひとりじゃたいへんでしょ。ぼくじゃあ、たよりにならないし」

せっかかないアイデアをおもいついたのに、おかあさんは目をそらしたままだった。

おとうさんとケンカをしてから、おかあさんはおばあちゃんの病室に泊まっていなかった。だからといって仲なおりをしたわけではなくて、土日のあいだも、おとうさんとおかあさんはほとんど口をきいていなかった。運動会が行われる来週の土曜日までは、なんとかして仲なおりをしてほしい。

「ぼくがおとうさんをお願いしてみようか？ おそい時間になつてもいいから、おばあちゃんのうちにきてくださいって。それで三人で泊まろうって」

おかあさんとは反対に、ぼくはウキウキしていた。たしか、おとうさんの会社からおばあちゃんのうちまでは地下鉄一本で行けたはずだ。

「わかったわ。今夜、おかあさんからおとうさんをお願いしてみる。でも、もしもおとうさんが無理だつて言つても、おとうさんをきらいになつちゃダメよ」

おかあさんは、自分に言いかけさせているようだった。

その晩、ぼくはなかなかねむれなかった。おとうさんとおかあさんがまたケンカをはじめたら、ぼくはすぐに部屋をどびだして、おとうさんにあやまるつもりだった。

十時まではおきていたけど、ぼくはいつのまにかねむってしまったらしい。

「健ちゃん、もう七時になるわよ」

おかあさんの声がして、ぼくは目をさました。おかあさんがドアのところからこつちを見ている。

「おとうさんは？」

「もう会社に行ったわ」

おかあさんの声は明るかった。

「金曜日のことは、どうなったの？」

「すぐには返事ができないつて。でも、まえむきにケントウしてみらつて」

「なんだか、会社のひとどうしの話しあいみたいだね」

国語 その二（七枚のうち）

ぼくが言うと、おかあさんがふきだした。そのあと食べた朝ごはんがおいしくて、ぼくはおかわりをした。

金曜日の朝がきた。おとうさんが会社から戻りすぐおばあちゃんの家に来てくれるというので、おかあさんはすぐよくよるこんでいた。ぼくもうれしかつたけど、緊張もしていた。今夜、おばあちゃんが死んでしまうんじゃないかと心配だったからだ。

——カゼをひいたら、おばあちゃんのうちに行かなくてすむよな。

ぼくはひそかにぐあいが悪くなることを期待しながら授業をうけた。でも、セキも出なければ、おなかも痛くならなかった。

五時間目がおわり、ぼくは家に帰った。ひと休みしてから、おかあさんとぼくはバスで駅にむかった。おばあちゃんの家まではJRの電車と地下鉄で一時間くらいかかる。

電車のシートにならんですわっていると、おかあさんの携帯電話にメールがとどいた。

「おとうさんだわ」

そうつぶやいてメールを読みだしたおかあさんは、「もう、どうして」と、くやしそうに言って、携帯電話をぼくに見せた。

〈急な仕事が入って、何時に会社を出られるかわからない。しかし、真夜中になってもそっちに向かうつもりでいる。マコトに申し訳ない。取り急ぎ連絡まで。〉

おとうさんからのメールを読んで、ぼくはホッとした。何時になったとしても、おとうさんはおばあちゃんの家に来てくれるのだ。ところが、おかあさんはおとうさんを疑っていた。何時になったとしても、おとうさんはおばあちゃんの家に来てくれるのだ。ところが、おかあさんはおとうさんを疑っていた。

「本当なのかしらね。つぎには、仕事がおわらなくて徹夜になりそうだなんでメールを送ってくるかもしれないわ」

「それじゃあ、おとうさんは初めからおばあちゃんの家にくるつもりはなくて、おかあさんやぼくにウソをついてたつてこと？ それは絶対にないって」

そんなふうにおとうさんを疑うおかあさんが情けなくて、ぼくの中から涙がこぼれた。

「ごめんなさい、健ちゃん。おかあさんが悪かったわ」

電車のなかなので、おかあさんの声は小さかった。

「おとうさんは、かならずくるよ」

そう言いながら、もしもおとうさんがおばあちゃんの家になかったらどうなってしまふのだろうと、ぼくは不安になった。くるから。おとうさんは絶対にくるから」

ぼくは①を握りしめて、じっと目をつむった。

「こんにちは、健斗くん。今日はごころうさま」

おばあちゃんの家に着くと、千夏おばさんがむかえてくれた。

「こんなときだから、お仏壇にお線香はあげなくていいからね」

おばさんが冗談めかして言って、「もう、お姉ちゃんたら。へんなことを言わないでよ」と、おかあさんが笑顔になった。

千夏おばさんはヘンシチュウ者をしていて、そのせいか話がとてもおもしろい。歳はおかあさんより十二も上で、二人のあいだに行雄おじさんがいる。千夏おばさんの子どもは奈緒さんひとりで、もう大学生だ。行雄おじさんのところには高校生と中学生の男の子がいる。

「おばあちゃんに会うまえに、うがいと手洗いをしてきてね」

千夏おばさんに言われて、おかあさんとぼくは洗面所に行った。古い木造住宅なので、廊下を歩くと板がきしんだ。洗面台も小さくて、気をつけて手を洗わないと、はねた水が床をぬらしてしまう。

おばあちゃんはお茶の*お点前をする部屋でねていた。寝室は二階だけど、介護をするには不便なので、一階の和室にふとんをしいたという。

おばあちゃんは静かに寝息を立てていた。点滴をしているので病院とかわらないかんじだけど、顔色はまえよりもよかった。やっぱり、おばあちゃんにはこの部屋があっている。

国語 その三（七枚のうち）

それから、千夏おばさんがおばあちゃんの介護について説明してくれた。このあと午後六時に、近くの病院の看護師さんが訪問看護にきてくれる。点滴のパックをとりかえて、のどについたタンも吸引器で取ってくれる。家族がしてもいいのだが、いまのところ看護師さんをお願いしている。ただし、オムツはこつちがかえる。

千夏おばさんは看護師さんのシヨチがすむまで一緒にいてくれるというので、ぼくはホツとした。おかあさんも安心してみた。い、おばあちゃんのそばにすわり、おでこや髪をなでている。時計を見ると、六時まで二十分くらいあった。

「ぼく、トイレに行ってくる」

ところが、おとうさんがきてくれるかどうか心配で、なかなかオシッコが出ない。たぶん、ぼくは五分以上もトイレにいたとおもう。

ようやくすませて、お点前をする部屋の手前までくると、千夏おばさんの笑い声が聞こえた。

「まったく、もう。あんたは小さいころから疑りぶかかったのよね。田中さんが聞いたらおこるわよ。健斗くん、ちゃんと口どめしておきなさい」

「だいじょうぶだよ。ぼくは口がかたいから」

ふすまを開けるなりそう言うと、千夏おばさんが手をたたいて笑った。

「ひとりっ子はたいへんよね。自分ひとりで両親のあいだをとりもたなくちゃいけないんだから。うちの奈緒も、わたしが知らないところで、ずいぶん気をつかっていたみたい」

本当にそのとおりなのだというきもちをこめて、ぼくは大きくうなずいた。そのとき、おばあちゃんがセキこんだ。千夏おばさんがそばによって胸をさすると、おばあちゃんは静かになった。

「奈緒はね、自分と同じ苦労はさせたくないから、子どもを産むなら二人以上にするんですって。そうよ、あんたはまだ若いんだし、もうひとりつくればいいじゃない。健斗くんなら、やさしいお兄ちゃんになるわよね」

千夏おばさんに言われて、ぼくはさつきよりもさらに大きくうなずいた。

「ほら、がんばりなさい」

おばさんにはげまされると、おかあさんはこまったようにうつむいた。

それから千夏おばさんが、子どもだったころの話をしてくれた。まえにも少しだけ聞いたことがあったけれど、千夏おばさんとおばあちゃんはとても仲が悪かったそう。だから、お茶もおそわらなかつたという。

「おかあさんは、とにかく行雄のことが大好きでね。わたしがいくら成績が良くても、ちつともほめてくれないの。高校生のときが一番険悪だったかしら。口をひらけば、女には勉強よりもたいせつなことがあるって言って、もう顔を見るのもイヤだったわね。おとうさんは、おかあさんに②があがらないし。だから、大学に進むときに家を出たのよ。いっそのこと縁を切りたかったけど、そうもいかないとおもってたまに帰ってくれば、さんざん文句を言われてね。結婚にも、共働きで子育てをすることにも反対されて、もういいかげんにしてほしいってかんじだったわ」

そこまでをひと息に話すと、千夏おばさんはおばあちゃんを横目で見た。

「正直に言うかね、お医者さんから、もう意識はもどりそうにないって言われたときに、わたしはそれなら看病ができるっておもったの。薄情なようだけど、おかあさんが意識があったらたいへんよ。ああでもない、こうでもないって、いちいち指図をされて。どんなに気をつかっても、文句を言われて」

「そんなこと言っても、お姉ちゃんはおかあさんにもう一度、お茶をたててもらいたいんじゃないの」

おばあちゃんの枕もとには竹の筒がおいてあった。抹茶をすくう茶しゃくを入れておくもので、おばあちゃんはとてもたいせつにしていた。

「ああ、あれね。あれは看護師さんが、手にものを持たせると刺激になって、意識がカイフクするキツカケになるかもしれないって言うからよ。『ふだんよく手にしていたものはありませんか？』ってきかれたから、てきとうに選んだだけ」

千夏おばさんがあわてて弁解したので、ぼくはおかしかった。

「話しかけるのも大切なんですって。きのうの夕方おみまいにきてくれた茶道部の生徒さんたちにお願ひしたら、ひとりひとり

17	受験番号
中	

国語 その四（七枚のうち）

感謝の言葉をかたりかけてくれたんだけど、おかあさんはなんの反応もなし。もつとも、行雄がいくら呼んでもびくりとも動かなかつたんだから、お医者さんの言うとおりで、意識がもどる見こみはないんでしょ」

「お姉ちゃんは、おかあさんにどんなことを話してるの？」

ぼくのおかあさんがきくと、千夏おばさんが③をすくめた。

「なにも話してないわ。だって、おかあさんへの文句ばかりになっちゃうもの。この家でも原稿を読んだり、*ゲラのチェックをするくらいならできるけど、不便であることにはわりはないし。明るいうちならまだしも、夜になってから長年にわたるうらみつらみを話していたら、とりかえしのつかないことをしでかしちゃうかもしれないじゃない」

千夏おばさんはこやかな顔で話したが、ぼくはどう反応すればいいのかわからなかった。

「いまなら健斗とわたしがいるから、なにを話してもだいじょうぶよ」

「いいわよ。おかあさんへの文句なら、さっきも言ったから」

「おかあさん、聞こえますか？ こんなふうには悪態をついてばかりいますけど、千夏お姉ちゃんが一番よく看病をしているんですよ。おかあさんがこのうちに帰ってこられたのも、千夏お姉ちゃんのおかげですからね。感謝してくださいね」

「ちよつと、やめて。わたしはそんなオン着せがましいつもりでやってるんじゃないんだから」

千夏おばさんとおかあさんが言いあっていると、おばあちゃんが頭を動かした。なにかをさがすように、顔を左右にむけていく。

「おかあさん、おばあちゃんが」

ぼくはおどろいて、おもわずあどざりした。

「おかあさん」

千夏おばさんが、おばあちゃんの枕もとに正座をした。おかあさんも、千夏おばさんのとなりに正座をして、おばあちゃんに話しかけた。

「おかあさん、わかりますか？ 千夏お姉ちゃんですよ。一生懸命、おかあさんの看病をしているんですよ」

すると、おばあちゃんが顔をおかあさんたちのほうにかたむけた。でも、目はつむつたままだし、意識があるようには見えなかった。

千夏おばさんは両手の指先を畳につけて、深々とおじぎをした。ぼくのおかあさんも、千夏おばさんと同じようにおじぎをした。その時間はとても長くかんじられた。

姿勢をもどした千夏おばさんが腕時計を見て、「あら、もう六時になるわね」とつぶやいた。

そのことを待っていたようにチャイムが鳴った。千夏おばさんを先頭に三人で玄関にむかうと、カバンを持った看護師さんと一緒におとうさんが立っていた。

「ちよつと④がすいたんで、きてみたんだ。十分くらいで、また会社にもどらなくちゃいけないんだが」

おどろいて返事のできないおかあさんにかわって、千夏おばさんがおとうさんにあいさつをした。

「まあまあ、田中さん。よくきてくださいました」

看護師の女性は急いでいるらしく、「すみません、おじやまします」と言っ、廊下を奥にむかした。ぼくたちもついていくと、おばあちゃんが苦しんでいた。声にならない声をだして、頭を左右にふっている。

「だいじょうぶですよ。すぐにタンを取りますからね」

やさしい声でおばあちゃんに話しかけると、看護師さんはカバンからとりだしたビニールの手袋をはめた。千夏おばさんが吸引器をセットして、看護師さんは右手に持った透明なチューブをおばあちゃんの鼻の穴に入れた。そのまま、どんどんチューブを奥に入れていく。

ぼくはこんな光景を見るのは初めてだった。おばあちゃんは痛みもせず、タンが吸いあげられるにつれて苦しまなくなった。「この方はすごいよ。このあいだまでいた病院では、新人の看護師にタンの吸引をさせるものだから、おばあちゃんが痛がつて見ていられたかったもの」

17	受験番号
中	

国語 その五（七枚のうち）

千夏おばさんが言って、おとうさんが感心したようにうなずいた。「オムツは、かえましたか？」

看護師さんの質問に、千夏おばさんが首を横にふった。

「それなら、点滴のパックを交換するまえにかえてしまいませんか？ 床ずれの様子も見たいので」
おとうさんに肩をたたかれて、ぼくたちは廊下に出た。

「悪かったな、健斗。いろいろ気をつかせて」

「そんなことないよ。いそがしいのに、きてくれてありがとう」

「学校は、どうだった？」

おとうさんにきかれて、ぼくは昼休みにハリケーン・リレーの練習をしたことや、算数のテストがちゃんとできたことを話した。安心しておとうさんの顔を見るのは久しぶりだった。

「ありがとうございます」と、千夏おばさんとおかあさんがお礼を言う声が出た。

「なにかありましたら、遠慮せずにご連絡ください」

看護師さんが廊下に出てきて、「ありがとうございます」と、おとうさんが頭をさげた。ぼくも感謝のきもちをこめておじぎをした。

看護師さんにつづいて、おとうさんと千夏おばさんも帰っていった。おとうさんがおばあちゃんの家にもどってくるのは、夜の十時半すぎになるといふ。

「ほらね、やっぱりおとうさんはきてくれたでしょ」

ぼくはおかあさんに⑤をはった。

「ごめんなさい。本当にもうしわけありませんでした。だから、おとうさんには疑ったことは言わないでね」

ぼくがエラそうにうなずくと、おかあさんがぺこりと頭をさげた。

「おかあさんはね、小さいころ、千夏お姉ちゃんのことをおかあさんだとおもっていたの。やさしくて、いつも一緒にいてくれたから。小学生になるころには、お姉さんなんだったわかってたけど、十二も歳が離れているから、きょうだいだっていう気がしなくてね。でも、このごろ、やっぱりわたしたちはきょうだいなんだっておもっているよ」

そのあと、おかあさんは千夏おばさんが家を出ていったときの悲しさや、おばあちゃんがさみしそうにしていたので、お茶をおしえてもらうことにしたといった話をしてくれた。

おばあちゃんは点滴をうけながら静かにねむっていた。

「それで健ちゃん、弟と妹のどっちがほしいの？」

とつぜんきかれて、ぼくはあせった。

「どっちでもいいよ。ぼくが決められることじゃないんだし」

「でも、弟だったら、一緒にサッカーができるし、妹だったらかわいいし」

「本当に、どっちでもだいじょうぶだよ。ちゃんと仲良くするから」

そう答えながら、ぼくはいつかその子に今日の出来事を話してあげたいとおもった。それはずっとずっと先のことだろうけれど、その日はきつとくる気がした。

（佐川光晴の文による）

（注）*お点前……………作法にしたがってお茶を立てること。

*ゲラ……………文字の間違いなどを直すための試し刷り。

17	受験番号
中	

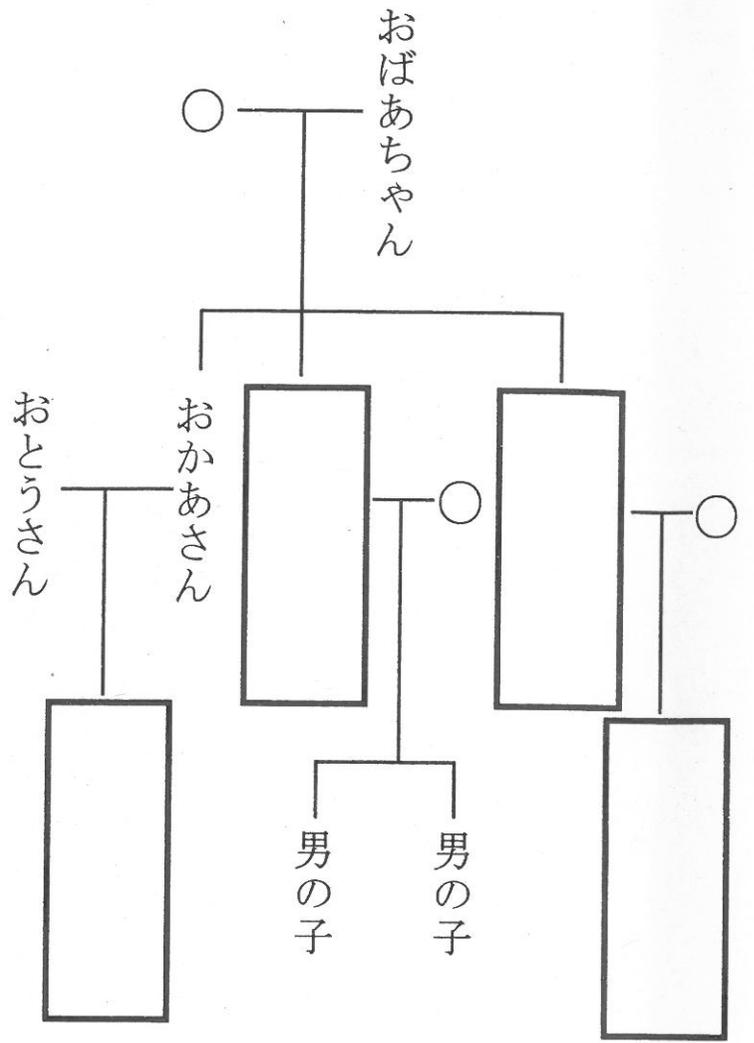
国語 その六 (七枚のうち)

問一 文中の二重線部の空欄①～⑤に入る語を後の(ア)～(キ)から選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二度使ってはいけません)

- ①を握りしめて……………
- ②があがらない……………
- ③をすくめた……………
- ④がすいた……………
- ⑤をはった……………

- (ア) 腹 (イ) 肩かた (ウ) 手 (エ) 足 (オ) 拳こぶし (カ) 胸 (キ) 頭

問二 「おかあさんのきょうだい」を含む家系図を、左の空欄に名前を入れて完成させなさい。



問三 「ぼくはウキウキしていた」とあるが、どうして「ウキウキ」していたのですか、説明しなさい。

17	受験番号
中	

国語 その七（七枚のうち）

問四 「健斗くんは、ちゃんと口どめしておきなさい」とあるが、どのようなことを口どめしておけばいいのですか、説明しなさい。

問五 「千夏おばさんがあわてて弁解した」とあるが、それはどうしてですか。三行以内で説明しなさい。ただし、一行の枠内に二行以上書いたり、枠をはみ出して書いたりしてはいけません。

問六 「このごろ、やっぱりわたしたちはきょうだいなんだっておもうのよ」とあるが、おかあさんがこのように千夏さんを「きょうだい」と実感するようになったのはどうしてですか、説明しなさい。

問七 文章中のカタカナを漢字に直しなさい。

	ケントウ		マコトに
	シヨチ		カイフク
			オンジユウ者
		オン着せがましい	